２　実践事例

【いきる】の実践事例　　～身近な災害から防災学習の必要感をもつ～　〔意欲・関心〕

学　年	３年
単元名	「大雨災害　備えあればうれいなし」
目　標	身近に避難が必要な災害が起きていることを知り、防災バックに入れたいものについて考える活動を通して、防災学習の必要感をもつようにする。
副読本	P．４６～４７「岩手県の主なさいがい」中心価値「そなえる」　⑰【自然災害の歴史】 P．６４「家族で地震にそなえましょう」中心価値「そなえる」　⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】

《授業の実際》

最初に、雫石町や岩手県で起きた大雨災害を取り上げ、大雨の災害の恐ろしさや命を守るためには安全な場所に避難することが大切なことなどを考えさせた。

次に、非常時持ち出し品（防災バック）は何が必要か考えさせた。災害が起こったらどんな生活の変化が起こるのか予測させた。子どもたちは、「電気が止まる」「水が止まる」「ガスが止まる」「寒い」「食べられない」など実際の経験から考えていた。

更に、自分にとって「何が」「何のために」必要か、持ち物を選ぶ観点をはっきりさせてから個別に考えさせた。話し合い活動では、自分の選んだものが「何のために」必要なのか発表することができた。

何のために入れるのか考えを話している

実際の防災バックの中身を確認している

《副読本の活用》

過去に雫石町で起こった大雨災害について知ることをきっかけに、復興教育を自分事としてとらえ、必要感をもって単元を通した課題づくりを行うことができた。

防災バックの存在を知り、「水道・電気・ガスが使えなくても３日間生き延びるため必要な物」を備えるという目的をはっきりさせて活動をすることができた。

《授業の分析》

平成２５年に雫石町で起きた大雨災害の様子を導入段階に活用することで、災害が自分たちの身近なところで発生していることに気付き、自分事として主体的に学習に向き合う真剣な態度を育成することができた。また、具体的に防災バックの中身を考えることで日頃の備えが大事であることが実感できた。

《成果と課題》

身近な災害と副読本を関連付けて活用したことで、中心価値「そなえる」の資料を使って、意欲・関心を高めることができた。

災害発生後、生活がどのように変化するか具体的に考えた上で、防災バックの中身を考えたことで、自分に「何が」「何のために」必要な物なの焦点化したか話し合いをすることができた。

自分自身が防災バックを背負って避難するという意識が薄かった。「自分が持てる重さ」「素早く避難できる」防災バックになっていない児童もいた。「重さ」や「量」に関しても確認すべきであった。

【いきる】の実践事例

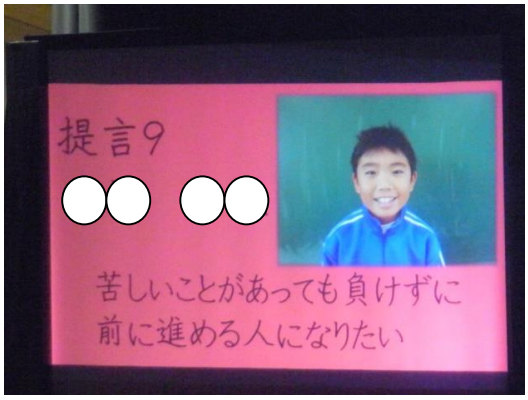
～自分たちの未来や生き方を見つめる～　〔意欲・関心〕

学　年	５年
単元名	「鍬ヶ崎のことを伝えよう」
目　標	東日本大震災での津波体験からできた宮古市立鍬ヶ崎小学校の五つの提言をもとに、これからの自分たちの生き方を見つめる。
副読本	Ｐ．３４～３５「未来のために―五つの提言」 中心価値「いきる」　④【夢や希望の大切さ】

《授業の実際》

７月に宮古市鍬ヶ崎地区にある熊野神社、浄土ヶ浜マリンハウス、宮古市魚市場を訪問して学んだことや感じたことを、１０月の学習発表会で表現した。劇では、がれきの町の絶望的な場面から、海の怖さ、海の豊かさ、人々のエネルギー、そして鍬ヶ崎の人々の様子から感じたことから、自分たちの未来の生き方を考える「１２の提言」の場面へとつながるようにシナリオを作成した。シナリオは見学時の感想やしおりのメモ、写真などをもとに、総合的な学習の時間を使い、児童が中心となって考えた。

劇の練習風景



これからの生き方を見つめた「１２の提言」

《副読本の活用》

７月に宮古市鍬ヶ崎地区の様子について、副読本を用いて事前学習を行った。さらに児童は副読本をとおして「鍬ヶ崎小学校５つの提言」というものがあることを知り、その提言をもとに「安庭小学校５年生　１２の提言」を考えた。１２の提言は学級の児童１２人、１人ひとりが未来をどのように生きていきたいかという自分の生き方を見つめるものになった。

《授業の分析》

熊野神社、浄土ヶ浜マリンハウス、宮古市魚市場の３人の方々に聞いた被災の様子から、劇のシナリオ作成、そして劇練習をとおして、次第に児童に変容が見られるようになった。７月の訪問時点では、「津波は怖い」「鍬ヶ崎の人たちがかわいそう」という意識だけだったが、練習を重ねるうちに鍬ヶ崎の人々が伝えたかったことを考えるようになってきた。練習の終盤にもなると鍬ヶ崎の人々の思いを自分たちで伝えたいという思いが強くなり、演技にも磨きがかかってきた。

《成果と課題》

副読本を活用して、「震災の悲惨さ」だけでなく、「鍬ヶ崎の人々とのかかわりから、自分の生き方を見つめる」という段階まで児童に考えさせることができた。

「１２の提言」を学習発表会だけで終わらせるのではなく、機会を見て振り返らせ、震災の悲しみやこれからの生き方を忘れないようにさせていきたい。

【かかわる】の実践事例

～危険個所を調べ、防災マップにまとめる～　〔知識・理解・体験〕

学　年	３年
単元名	「命を守れ！その時あなたはどうする？」
目　標	これまで地域について学習してきた経験や人々とのつながりを生かして、仲間と協力して災害時に地域で安全なところ・危険なところについて調べ、防災マップづくりを行う。
副読本	Ｐ．３８～３９「防潮堤を見て学ぶ―宮古市田老」 中心価値「かかわる」　⑬【地域づくり】

《授業の実際》

「もし、地震や大雨の災害が起こった時、安庭地区はどうなるか」想像させながら、通学路にある注意する個所や安全な場所、施設を調査した。

防災マップ作成に必要な情報を収集し、危険の程度について話し合い、危険レベルを！マークの数で表した。作成した防災マップを見て、地域の特色を確認した。

大雨災害が起こった時に、どのように行動すればよいか、防災マップを活用して考えることができた。

地域の危険な場所に注意しながら調べる

調べたことや気が付いたことをまとめる

《副読本の活用》

田老町の地域に応じた防災設備のあり方や人々の危機管理意識の大切さに触れることで、自分たちの町、暮らしを守ってくれる人や施設について理解を深めることができた。

副読本を活用することで、自分たちの町では災害を防ぐためにどんな施設や工夫があるのか、田老町の現状と比較しながら学習をすすめることができた。

《授業の分析》

地震や大雨災害が起きた時に、地域で安全なところや危険なところを知ることができた。危険個所は、通学路や地域の危険レベルを設定しながら把握した。学級全体で危険レベルの意識をそろえることで、防災マップを生かした避難を同じ危機管理意識で考えることができた。

《成果と課題》

子どもたちの調査した情報だけでなく、地域の方や保護者からの防災情報を生かした防災マップづくりを行ったことで、実際に活用可能な防災マップを作ることができた。

地域の安全な場所を調査することで、地域への安心・信頼を感じたり地域への愛着を育んだりすることができた。

防災に関する専門的な知識が不足していたため、危険レベルの設定が正しいかどうか判断がつかない場合があった。消防署や地域の防災課と連携して、正しい情報を収集していきたい。

【かかわる】の実践事例

～応急手当の基本的な方法を身につける～　〔知識・理解・体験〕

学　年	４年
単元名	「応急手当のしかた」
目　標	けがの基本的な手当など，応急手当の基本的な方法を学ぶことで，地震や火災などの災害発生時や普段の生活においてけがをしたときに手当てができるようにする。
副読本	Ｐ．５７「応急手当のしかた」 中心価値「そなえる」　㉑【身を守り，生き抜くための技能】

《授業の実際》

はじめに出血，骨折，やけどなど普段の生活の中でも起こりうるけがについて話し合いをした。実際にけがをことのある児童の話から，応急手当の大切さをとらえさせ，自分でもいざという時に応急手当ができるようにしたいという意欲をもたせた。

今回は三角巾，代用品として風呂敷を使っての応急手当のしかたを学ぶことを伝え，「圧迫」「固定」「被覆」の３つの役割があることを確認した。その後，実際に三角巾を使用しながら「圧迫止血」と「腕の固定」のしかたを練習した。

児童一人一人が三角巾のたたみ方と本結びのしかたを練習している

《副読本の活用》

授業の導入時に，地震や火災時または普段の生活の中で想定されるけがの種類を確認するために副読本の資料の一部を活用した。応急手当てが必要な場面が，自分たちの生活の身近なところにあるということを再認識することができた。

《授業の分析》

児童全員が三角巾を使っての応急手当のしかたを体験することができた。「圧迫止血」と「腕の固定」という手当の基本的な方法を学ぶことで，応急手当のしかたを知っておくと，いざという時に役立つことがわかったようだ。

また，「今後何かあった時に，三角巾を使って手当をしたい。」という児童の感想から，災害や事故に対する心構えをもたせることができたと思われる。

《成果と課題》

児童一人一人が体験活動を通して，三角巾を使っての応急手当の基本的な知識を身につけることができた。また，災害発生時に備え，準備・練習しておくことの大切さを確認することができた。

さまざまな状況を想定しての対応，手当のしかたなどを児童と確かめていく必要がある。また，身につけたことを意図的に想起させ，実践的なものにしていく必要がある。

【かかわる】の実践事例

～体験を通して大雨の知識を習得する～　〔知識・理解・体験〕

学　年	５年
単元名	「安庭小学区で大雨　そのとき　どうする？」
目　標	実際に地域を回りながらの体験や実験をとおして、大雨災害の様子やメカニズムを理解し、知識を習得する。
副読本	Ｐ．５１「急な大雨・かみなり・たつ巻」 中心価値「そなえる」　⑯【自然災害発生のメカニズム】

《授業の実際》

本単元のゴールは、入手した情報から状況を判断して安全な行動を考えることである。しかし、児童に思考・判断させるためには、大雨の知識・理解が不可欠であり、またその知識は体験に裏付けられたものでなければならない。そこで、平成２５年８月９日に雫石町で発生した大雨災害の様子を学ぶことをとおして知識を習得させた。実際に地域の人から当時の様子を聞きながら調べ学習を行った。さらに、降水量の感覚をつかませるため、急な増水が危険であることを実感させるための簡単な装置を用いて実験した。理科「流れる水のはたらき」を発展的に扱ったり、帰りの会でトピックとして扱ったりした。

H25.8.9の大雨災害の様子を確認している

急な増水について装置を用いて実験している

《副読本の活用》

副読本の中で大雨や土砂災害に関する部分を中心にして活用した。副読本の中には、ｐ５０の「台風のしくみと被害」、ｐ５１の「急な大雨・かみなり・たつ巻」の箇所しか該当する部分がないため、岩手県から発行されている防災教育DVDも合わせて活用した。副読本のコピーを教室に既習事項として掲示し、児童が学習したことを振り返りやすいように工夫した。

《授業の分析》

平成２５年当時、児童は３年生で、記憶が曖昧になっていたが、自分たちで実際に地域を回ってみたことで、「～ミリメートルの雨だとこの辺は危ない」「この辺は坂になっているため、水が来て通れないだろう」などということを実感させることができた。また、動画を使って川が短時間で増水する様子を見せたが、簡単な実験装置を用いて試したことで、体験をとおした生きた知識を習得することができた。

《成果と課題》

単元終盤の思考判断の授業に生かされるように、習得させること精選し単元構成を考えることができた。

副読本の内容が、地震や津波に関するものが多くい。そのため、大雨や土砂災害の知識を習得させる時間すべてに副読本を活用することは難しい。

【そなえる】の実践事例

～安全に避難する方法を主体的に思考する～　〔思考・判断・表現〕

学　年	１年
単元名	「きょうしつのきけんをみつけよう」
目　標	教室内における危険箇所を知り、もしも地震が起きたらどんな危険が考えられるか、どのように行動すれば自分の身を守れるのかを知ることができる。
副読本	Ｐ．５６～５７「みんなで、ぼうさい力を高めよう」 中心価値「そなえる」　【身を守り、生き抜くための技能】

《授業の実際》

東日本大震災のとき、幼稚園や保育所、家庭などでどのように行動したかを想起させ、安全な場所に避難したことを思い出させた。その後教室内に目を向けさせ、どこがどのように危険なのかをグループごとに考えさせた。

教室内の異なる写真を見ながら、どうして危険だと感じたのかを話し合いながら危険箇所に印をつけていった。

それぞれのグループで話したことを全体に広げ、教室内の危険箇所と避難の仕方を確認した。

グループで危険箇所を話し合っている。

他のグループの内容を全体で確認。

《副読本の活用》

授業の終盤で、自分の身を守るための方法を学ぶ際に活用した。指導内容に応じて資料を活用することにより、知識としてすでに物事を知っている児童も、安全な避難の仕方について理解を深める一助となった。

《授業の分析》

自分たちが過ごす教室内にもたくさんの危険があることを理解することができた。本時では、友だちと考えを出し合うことによって、自分では気付かなかった危険箇所に目を向けたり、なぜ危険なのかを考えたりすることができた。

《成果と課題》

副読本を活用し、自分たちの生活に置き換えて学習することによって、今までは「指示を聞いて避難する」にとどまっていたものが、思考・判断を伴っての行動に変容していく様子が見られた。

学習したことが生かされていくよう、繰り返し指導にあたったり、発達段階や地域の特性に応じて習得させる知識や技能を見出したりしていくことが必要である。

【そなえる】の実践事例

～安全に避難する方法を主体的に思考する～　〔思考・判断・表現〕

学　年	１年
単元名	「きょうしつのきけんをみつけよう」
目　標	教室内における危険箇所を知り、もしも地震が起きたらどんな危険が考えられるか、どのように行動すれば自分の身を守れるのかを知ることができる。
副読本	Ｐ．５６～５７「みんなで、ぼうさい力を高めよう」 中心価値「そなえる」　【身を守り、生き抜くための技能】

《授業の実際》

東日本大震災のとき、幼稚園や保育所、家庭などでどのように行動したかを想起させ、安全な場所に避難したことを思い出させた。その後教室内に目を向けさせ、どこがどのように危険なのかをグループごとに考えさせた。

教室内の異なる写真を見ながら、どうして危険だと感じたのかを話し合いながら危険箇所に印をつけていった。

それぞれのグループで話したことを全体に広げ、教室内の危険箇所と避難の仕方を確認した。

グループで危険箇所を話し合っている。

他のグループの内容を全体で確認。

《副読本の活用》

授業の終盤で、自分の身を守るための方法を学ぶ際に活用した。指導内容に応じて資料を活用することにより、知識としてすでに物事を知っている児童も、安全な避難の仕方について理解を深める一助となった。

《授業の分析》

自分たちが過ごす教室内にもたくさんの危険があることを理解することができた。本時では、友だちと考えを出し合うことによって、自分では気付かなかった危険箇所に目を向けたり、なぜ危険なのかを考えたりすることができた。

《成果と課題》

副読本を活用し、自分たちの生活に置き換えて学習することによって、今までは「指示を聞いて避難する」にとどまっていたものが、思考・判断を伴っての行動に変容していく様子が見られた。

学習したことが生かされていくよう、繰り返し指導にあたったり、発達段階や地域の特性に応じて習得させる知識や技能を見出したりしていくことが必要である。

【そなえる】の実践事例

～地震から身を守る方法を考える～　　〔思考・判断・表現〕

学　年	２年
単元名	「命を守れ！その時あなたはどうする？」～音楽室で地震が起きたら～
目　標	音楽室で大きな地震が起こったときの危険を想像し、安全な場所を見つけ、安全姿勢をとることができる。
副読本	Ｐ56　「みんなでぼうさい力を高めよう」 中心価値「そなえる」　⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】

《授業の実際》

まず、音楽室で大きな地震が起こったときに、どんな危険が考えられるかを話し合った。次に、今大きな地震が起きたという設定で、自分が安全だと思う場所で安全姿勢をとらせ、そこがなぜ安全と考えたのかを発表させ、音楽室の安全な場所について話し合った。

音楽室を授業場所とし、ここで大地震が起こったらどうなるかを、楽器や机等の教室の様子を見ながら、より現実的に考えられるようにした。

【自分が安全だと考えた場所で安全姿勢をとっている場面】

《副読本の活用》

安全と考えた場所について理由を発表し、話し合った後で、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」、という「三つのない」場所を見つけることを副読本の資料で確認した。自分の考えの根拠とすり合わせることができ、これからも自分で考え行動しようとする気持ちをもたせることができた。

《授業の分析》

普段使用している音楽室で行ったことにより、現実に自分の身に起こるかもしれないという気持ちをもつことができ、自分のこととして考えることができた。また、安全だと思う場所で実際に安全姿勢をとらせ、理由を発表させたことにより、安全な場所とはどんなところなのかを具体的にとらえることができた。

《成果と課題》

実際にその場所で自分の身を守るためにはどうするかを考えたことで、自分のこととして考え判断する力を付けることができた。

学年の系統性を考え、２年生段階で身に付けさせたい力を明確にして指導していきたい。

【そなえる】の実践事例

～安全に避難する方法を主体的に判断する～　〔思考・判断・表現〕

学　年	３年
単元名	「命を守れ！その時あなたはどうする？」
目　標	災害時に起こる様々な場面や行動について想定し、どのような理由でどう判断・行動するのかを話し合うことを通して、自分の命を守るために場面に応じたよりよい判断・行動をしている。
副読本	Ｐ．６０～６２「そのとき、どうする？」 中心価値「そなえる」　⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】

《授業の実際》

「一人で下校途中、学校から家までの真ん中あたりにいるときに、激しい雨が降り始めた。小学校への避難指示の防災無線がなっている。学校に戻るか、家に帰るか、どうする？」という場面設定をし、一人でいるとき、どのような避難行動をしたらいいのか考えさせた。

その際、地域の防災マップ作りで得た情報と体験をもとに思考・判断させた。実際に通学路を歩き、地震や大雨災害が起きたとき危険と感じる場所や危険レベルを確認した。

クロスロードゲームの手法を取り入れ、自分の考えをもったり、友だちの考えや価値観を知ったりする活動を行った。グループ活動では、判断の根拠を明らかにしながら話し合わせた。

グループで判断の根拠を明らかにしている

防災マップの情報と関連付けて発表している

《副読本の活用》

授業の導入時に、教室・音楽室・下校途中の地震に遭遇した場合の行動の仕方を確認するために副読本の資料の一部を活用した。災害時の基本的な身の守り方を副読本から学ぶことで、様々な災害に対して状況に合った判断と自分で行動しようとする態度を育てることができた。

《授業の分析》

単元を通して「危険基準の共有化」の指導を大事にしてきた。現地に足を運び、自分たちの目で危険な状況を確認し、話し合いのもと危険レベルを設定した。学習を支える知識や体験を共有し、災害に対する危険意識の基準を合わせることで、同レベルで思考・判断が行われ、有効な話し合いが行われた。

クロスロードゲームを使ったことで、どのような理由で判断・行動するのか、話し合いのポイントを絞って、考えを深めることができた。また、主体的に判断するよさを味わうこともできた。

《成果と課題》

判断基準となる知識を体験的活動から得ることで、思考力・判断力を高める学習を主体的に取り組むことができた。

子ども達が正しい判断をするために、知識や体験を系統的に積み重ね、学年に合った思考・判断場面を経験させる必要がある。

指導案は、別途資料に掲載

【そなえる】の実践事例

～安全な行動の仕方を主体的に判断する～　〔思考・判断・表現〕

学　年	５年
単元名	「安庭小学区で大雨　そのとき　どうする？」
目　標	これまで学んだ大雨の知識や経験をもとにしたり、友だちの考えを聞いたりしながら、状況に応じたより安全な行動の仕方を思考・判断している。
副読本	Ｐ．５８～６０「そのとき、どうする？」 中心価値「そなえる」　⑳【学校・家庭・地域での日頃の備え】

《授業の実際》

「前の日から弱い雨が降り続いている。今、あなたたちはある地区のある地点でゲームをしている。テレビを見ると大雨注意報と洪水注意報が発令された。」という場面設定をし、同じ方向に自宅がある児童同士がグループになって、どのような行動をしたらいいのか考えさせた。

その際、副読本を活用したり、実験装置を用いたりして得た知識、また実際に平成２５年に雫石町で実際に発生した大雨災害の様子を見て回った体験をもとにしたりして、思考・判断させた。

これまで身に付けた知識で構成された情報が次々に出され、身の回りの状況が変化する中で、情報から災害の発生や規模を予測して安全な行動の仕方を話し合わせた。

情報をもとに安全な行動を話し合っている

掲示された大雨の知識を活用している

《副読本の活用》

単元をとおして、理科の授業と帰りの会でのトピックとして、副読本を活用して知識を習得させた。副読本の資料は単元の終盤で思考・判断するために必要な知識にしぼり、教室に掲示して、児童が考えるための拠り所とさせた。本時では掲示された内容をもとに児童が話し合いをする場面が多くみられた。

《授業の分析》

単元をとおして、体験と知識を関連付けて大雨災害の学習をしてきたため、児童にしっかりと知識が身についていた。本時ではその知識を活用して、安全な行動を思考・判断することができた。また、個人で考える場面、グループで考える場面、グループの発表から考える場面を設けたことで思考がより深まった。

《成果と課題》

思考場面で、思考の観点を具体的に設けたことで、児童が何を考えればよいか明確にすることができた。児童が判断したことを専門家の視点から評価してもらうため、町の消防や防災課との連携を図ったことが効果的だった。

授業構成を２時間扱いにするなどして、児童が思考・判断するための時間を十分に確保する必要がある。

指導案は、別途資料に掲載

【そなえる】の実践事例

～地域で起きる災害に備え、自分の身の守り方を考える～　［思考・判断・表現］

学　年	６年
単元名	わたしたちにできること
目　標	地域の災害の特性や防災体制について理解し、災害によって引き起こされる危険を予測し災害時には、自らが危険を回避できる行動ができるようにする。
副読本	Ｐ．３４～３５「未来のために―五つの提言」 中心価値「かかわる」⑬【復旧・復興への歩み】

《授業の実際》

地震・津波・風水害発生のメカニズムについてそれぞれの班が調べてきたことを発表し、それぞれの特徴を捉えた。その後、雫石町内で起きた平成２５年８月９日の豪雨災害についてその当時の写真を見ながら想起した。

町の人たちが「その時どう行動したか」「災害後どんなことを考えたか」インタビューをしたことをもとに、自分の身を守るためには何が必要か家族とどのような話し合いが必要か考えた。また、地域の災害の被害を少なくするためには何が必要か考えた。

地域の人がどのように行動したのかインタビューによって学んだ

授業参観で、保護者へ自分の考えを発信した

《副読本の活用》

単元を見通して、地域に関わり、自分と地域社会との関係を考えることができる児童を育てるために、「いきる」「かかわる」「そなえる」の価値項目を位置づけた。単元の導入で、副読本を活用して命の大切さを学んだり、自然災害について自分で調べたりした。授業の中では、資料の内容を地域に合わせて修正・加工して活用した。今後、地域に発信するためにどのような方法があるか副読本をヒントに調べていきたい。

《授業の分析》

地域の人たちから、山津波があることや地域のダムが守ってくれることなど様々なことを学ぶことができた。授業の中では家族とこれから話し合いたいことでまとめとなったが、地域に何ができるのか考えるきっかけとなった。

《成果と課題》

単元計画を立てることにより、計画的に副読本を活用することができた。

地域の人たちとかかわることにより、実際には体験していないことを身近に感じて、災害が起きてから行動を考えることができた。資料からの読み取りだけでなく、三人の地域の方のそれぞれの立場からのお話を聞くことによって、より自分事として思考・判断することができた。

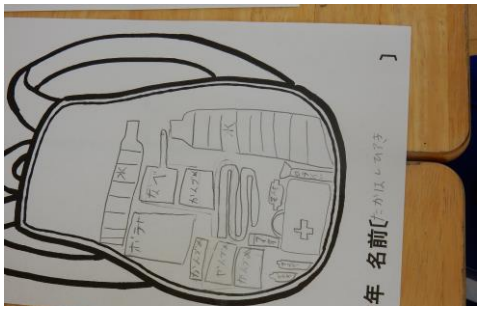
３　その他の実践

（１）土曜参観日における復興教育副読本を活用した授業公開

平成２６・２７年度第２回土曜参観日において、全学年で復興教育副読本を活用した防災教育の授業を行い、保護者や地域の方々に復興教育の実践について広く周知した。

１年「きょうしつのきけんをみつけよう」

２年「音楽室でじしんがおきたら」



３年「大雨災害　そなえあればうれいなし」

４年「応急手当のしかた」

５年「宮古訪問　鍬ヶ崎について調べよう」

６年「地域の減災　わたしたちにできること」

（２）５年生の年間の実践

５月　第１回避難訓練

６月　土曜参観日　復興教育副読本を活用した授業

７月　鍬ケ崎訪問　**被災地を訪問し３人の講師から講話をいただく**

９月　第２回避難訓練

１０月　学習発表会　**鍬ヶ崎訪問をきっかけに自らの生き方を考え発表した劇「安庭小　５年　１２の提言」の発表**

１２月　研究授業「安庭小学区で大雨　そのときどうする？」

２年前の雫石の大雨災害と同規模の災害を想定した避難について考えた。さらに災害についてのパンフレットを作成し、地域へ配付した。

２月　第３回避難訓練　１年間の防災学習のまとめの活動

被災地訪問を、学習のまとめではなく学習のきっかけとして位置付けたことにより、その後の復興教育を進める上で子ども達に強い動機づけとなった。

学習発表会の取り組みを通して、「被災地について知りたい」「何かをしたい」という考え方から、自分を見つめ直し「自分はこう生きたい」という考え方に変わっていった。課題を自分事としてとらえるようになった。

地域の素材を活用したことで、地形の特徴や災害の様子など実際の情報を生かして、根拠を持って思考、判断する実践的な学習をすることができた。

Ⅳ　研究のまとめ

１　研究の成果

・指導計画に「いきる」「かかわる」「そなえる」の具体項目を意図的に配置したことにより、復興教育の学習に児童が関心を高め、意欲的に課題に向かって取り組むことができた。さらに、体験を通して知識や理解を深め、思考・判断し実践に向かう学習の流れができた。

・指導計画を作成することにより、ねらいが整理され学習内容が明確になるとともに、主となる学習活動と各教科・各領域の内容の関連づけが図られ、教科横断的な学習カリキュラムを作成することができた。また、指導計画の吟味により学習活動の重複を防ぎ、焦点を絞って指導することができた。

・地域教材を用いて必然性のある授業を行うことで、児童が「ひと・もの・こと」に主体的にかかわり、進んで課題に向かう姿が見られるようになった。

・児童が経験や既習事項を生かして思考したり判断したりする場面を組むことにより、自分の身を守るために自分で情報を把握し、判断する実効的な力が身についてきている。この「わがこと意識」や自ら考え判断し表現しようとする態度は、他の教科・領域の学習にも反映されるものと期待する。

・復興教育副読本を地域やねらい、児童の実態に合わせて柔軟に活用することにより、活用の幅が広がり、防災の備えや復興の歩みがより身近なものとなった。

２　研究の課題

・児童が深く思考・判断・表現するための手立てがまだ不明確であり、取り組むための共通理解が不十分である。発達段階に応じた適切な手立ての実践と検証が必要である。

・防災教育の目標を学年毎に設定したが、発達段階に応じた知識・理解、経験の内容の系統性については吟味が不十分である。特に災害のメカニズム等に関する知識・理解の内容は膨大であり、低学年から学ばせる知識・理解及び経験の内容を発達段階に応じて整理し指導していく必要がある。

・日頃から地域に暖かく守られ育まれている本校の児童にとって、保護者や地域と協働した防災の活動や地域貢献が望まれており、実現に向けた組織的な検討や工夫、啓蒙が必要である。